

継承者

2021. 8. 3

もう一月前のことになるが、7月2日（金）に「第1回学校評議員会」が開催された。4名（1名欠席）の学校評議員の方々にご来校いただいた。こちらから学校経営の概要について説明をしたり、授業を参観していただいたりした。その後、お一人お一人から意見や助言をいただいた。

授業参観のためにと移動し始めたとき、一人の評議員の方が、「△△△△が妹の旦那なんです」とおっしゃった。一瞬、考えた。ということは、「〇〇ちゃんのお姉さんですか？」となった。△△さんも〇〇さんも、大学時代からよく知っている。一気に記憶が蘇った。〇〇さんとその評議員さん姉妹のご実家もわかる。確かに野田中の学区である。「これも縁ですね」となった。

これだけでも驚かされたのだが、まだ終わりではなかった。評議員会が終了し、会場をあとにしたところ、もう一人の評議員の方から声をかけられた。その方は、袋から何やら取り出しながら、実はと話してくださった。

袋から出てきたものは、「学級通信『薫風』」だった。なぜ、ここに私の『薫風』がと、多少混乱したが、その方のお話を聞いて納得した。その方は、私が以前勤めていた中学校に、2か月間ほどお休みをした英語の先生の代わりに来てくださった方だった。だから、お名前を見て、はじめてではないような感覚に襲われていたのである。

その方がこんな話をしてくださった。2か月間しかいなかったが、私が『薫風』を渡したこと、その後大事に取ってくださったこと、おまけに、その薫風には、「国語科通信『窓』」がはさまっていた。

そして、その方は、「私がこれをもっている仕方がないので、SS先生に差し上げてくださいます」とおっしゃるのである。その方は高校にも勤務したが、もう教壇には立っていない。若いSS先生のことを思いやってくくださったのである。

なぜ、こうなるかという、その方は、毎日、この「校長室だより」を読んでもらっている。だから、私の「学級通信『薫風』」は、もう在庫が1冊もないことも、4月からのSS先生の成長の軌跡もすべてわかっているのである。きっと、本当は私がSS先生に『薫風』を渡したいはずだが、1冊も残っていないので、渡せていないはずだと、その方は思いやってくくださったのである。

これらのことを、校長室でSS先生に伝えた。すると、SS君は「ああ、そうなんですか。がんばらなくちゃ」そして、「来年、学級担任になったら、学級通信を出したいんですけど、タイトルを『薫風』にしてもいいですか」ときた。お世辞でも社交辞令でもない。本気である。

私は何の躊躇もなく「ああ、いいよ。『薫風』を継承してくれる人が現れるとはね。こちらがお礼を言いたいくらいだ。英語の先生なんだから、なんか横文字でなくていいの」

現在のところ『薫風』のタイトルはお休み中である。私の中では、もう使うことはないだろうと思っていた。それが、一人の若者が登場し見事に蘇りそうである。教頭が“スーパールーキー”というだけのことはある。